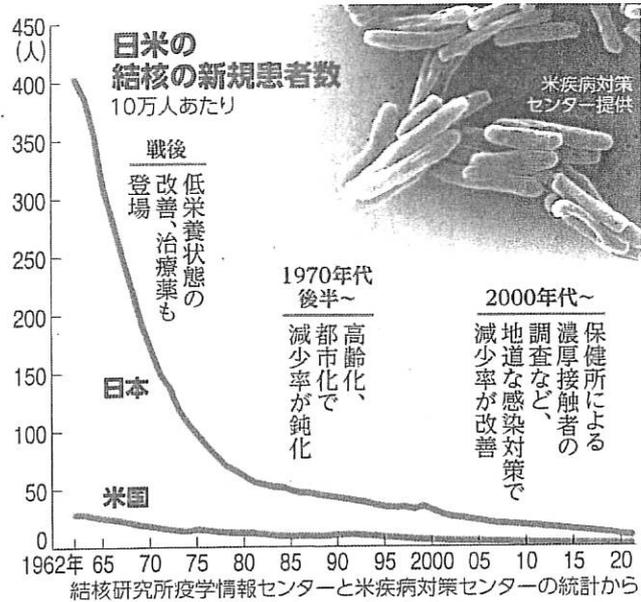


# 結核 ようやく「低蔓延」に

## 罹患率10人未満 G7で最も遅く実現

厚生労働省は30日、国内で2021年に結核との診断を受けた患者は1万1519人で、人口10万人あたりの新規患者数を示す罹患率は9.2人だったと発表された。統計が残る1951年以来、初めて10人を切り、世界保健機関(WHO)の分類で「低蔓延国」となった。「国民病」と呼ばれ、長く苦しんできた感染症を一定程度克服したが、主要7カ国(G7)では最も遅い実現となった。▼2面「長い闘い」

厚労省によると、国内で21年に結核と診断され、死亡した人は1844人。明治から戦前にかけては「不治の病」と恐れられ、最も死者が多かった1943年には17万人が亡くなった。貧しく栄養状態が悪いことで病気が広がったが、戦



### 折々のことば

鷲田 清一 2484

みんなね、人とかかわることに異常に臆病なの。

四元康祐

滞欧生活の長かった詩人は帰国し、日々こう感じる。声をかけた子供にも怪しまれた。「人を傷つけたり、自分が目立つたりすること」をみな怖れている。マスクの背後にもう一つ「無表情という仮面」があるようで、この関係の大海で個々の顔とどう出会うか、とまどうばかりだと。山崎佳代子・中沢けいとの鼎談「詩人のみた欧州」(日本文藝家協会オンラインサロン)から。

2022・8・31

後、特効薬の登場や栄養状態の改善、感染対策によって患者は急激に減少した。しかし80年代以降、長期の潜伏を経て発病する高齢の患者が目立つようになり、減少のスピードは落ちた。先進国が続々と低蔓延国になる一方、罹患率が高い水準が続いた。

97年には人口あたりの患者数が増加に転じ、99年に当時の厚生相が緊急事態を宣言。感染対策を進めて、00年に31.0人だった罹患率は、15年は14.4人と低下した。20年に低蔓延国入りをめざしていたが、同年の罹患率は10.1人とわずかに上回っていた。

新型コロナウイルスの流行による受診控えや保健所の繁忙による接触者健診の制限により、診断が遅れている患者がいる可能性も指摘され、引き続き感染対策を進めることが課題となっている。(神宮司実玲)

# 「国民病」長い闘い 時時刻刻

## すし詰め労働 特效薬が登場 高齢の患者増

長く公衆衛生上の大きな課題であった結核患者の減少に成功し、日本が「低蔓延国」入りを果たした。貧困の克服や高齢者対策の成果だが、なお高齢者の死亡率は高く、外国人の患者の割合が増えるという新たな問題も出てきている。新型コロナウイルス流行の影響もあり、専門家は「対策を緩めることはできない」と話す。

### 結核

結核菌が体内に入ることによる感染症。潜伏期間は一般的に半年から2年ほどとされるが、数十年経って発病する人もいる。初期はせきやたん、発熱など風邪のような症状が多いが、2週間以上続く咳や長期化する。肺以外に、腎臓、リンパ節、骨髄などに影響が及ぶことがある。治療をしないと半数程度が亡くなるとされる。

困問題と密接に関係した「不治の病」だった。戦後は特效薬となる抗生物質「ストレプトマイシン」が登場。栄養状態や労働環境の改善に加え、発症を抑えるBCGワクチンの接種や健診での早期発見、複数薬を組み合わせた治療が進んだ。中間層が豊かになった60〜70年代には毎年10%ずつ新規の患者が減った。第2段階は80年代以降、

高齢の患者を減らしていく道のりだ。高齢化の進展とともに、免疫が低下して発症する患者が増えた。都市化が進んで人が密集し、菌がうつりやすい環境が生まれたことも影響した。保健所による感染者の隔離や濃厚接触者の調査が地道に進められ、徐々に人口10万人あたりの患者数を示す罹患率は減ってきた。

低蔓延国入りには、新型コロナウイルスによる健康診断の受診者の減少、受診控えの影響もある。健診による早期発見、対応が欠かさない。加藤さんはい人が集まらなくなったことが、ほぼ患者数を減らすのかわり、診断の遅れによって重症化する人が増えたのかなど、今後数年は様子を見る必要がある」と指摘する。

世界的には結核対策は今なお、重要な課題だ。国連の「SDGs」(持続可能な開発目標)は、2030年までに流行を終息させることを目標に掲げている。世界保健機関(WHO)によると、発症していない患者数は、フィリピンが539人、インドネシアが301人、中国が59人、韓国が49人などとなっている。日本国内の患者に占める外国人生まれた人の割合も増えている。00年は2%だったが、21年には11%。多くは日本で働く20代という。この医療機関を受診した方よいのか入国時に説明したり、住環境を整えたりするなど対応が重要になる。

## 減少 受診控え 影響も

「コロナの影響もある」といって、そういう意味で、低蔓延国になったことは、転換点や考えをよぶの前提に、次の目標を考え「ではないか」。30日に記者

会見した結核研究所の加藤誠也所長は、こう話した。

日本が結核を克服する過程には、二つの段階があった。一つは、高度成長期まで、明治以降の産業革命で、工場などに人が集まってきた。結核菌が広がるやすい環境ができた。すし詰めになって働く労働者が多くかかると、苦しんだ。1950年までは年間50万人以上が結核を発症し、10万人以上が亡くなった。「国民病」「国民病」と呼ばれ、俳人の正岡子規、小説家の樋口一葉、歌人の石川啄木ら文化人も若

くして命を落とした。低栄養により免疫が低い人々が発症し、有効な治療法がないまま徐々に死への道を進んだ。社会構造や貧

困問題と密接に関係した「不治の病」だった。戦後は特效薬となる抗生物質「ストレプトマイシン」が登場。栄養状態や労働環境の改善に加え、発症を抑えるBCGワクチンの接種や健診での早期発見、複数薬を組み合わせた治療が進んだ。中間層が豊かになった60〜70年代には毎年10%ずつ新規の患者が減った。第2段階は80年代以降、

高齢の患者を減らしていく道のりだ。高齢化の進展とともに、免疫が低下して発症する患者が増えた。都市化が進んで人が密集し、菌がうつりやすい環境が生まれたことも影響した。保健所による感染者の隔離や濃厚接触者の調査が地道に進められ、徐々に人口10万人あたりの患者数を示す罹患率は減ってきた。

世界的には結核対策は今なお、重要な課題だ。国連の「SDGs」(持続可能な開発目標)は、2030年までに流行を終息させることを目標に掲げている。世界保健機関(WHO)によると、発症していない患者数は、フィリピンが539人、インドネシアが301人、中国が59人、韓国が49人などとなっている。日本国内の患者に占める外国人生まれた人の割合も増えている。00年は2%だったが、21年には11%。多くは日本で働く20代という。この医療機関を受診した方よいのか入国時に説明したり、住環境を整えたりするなど対応が重要になる。

**結核と日本の歴史**  
産業革命で流行。「国民病」「亡国病」と呼ばれる。樋口一葉、正岡子規、石川啄木らが結核で苦しむ

明治時代	結核で苦しむ
1919年	旧結核予防法制定
1935~43年 47~50年	結核が死因の1位に
1949年	抗生物質ストレプトマイシンを輸入
1971年	抗生物質リファンピシンを使用
1977年	結核が死因ワースト10から外れ、11位に
1997年	新規患者数、発症率とも約40年ぶりに上昇
1999年	厚生大臣(当時)が結核緊急事態を宣言
2021年	日本が初の結核「低蔓延(まんえん)国」に

「低蔓延国」となったものの、現在も国内で年間1万人以上の人々が結核と診断されている。2000年以降、85歳以上の患者の割合が増え、患者全体の30%を占める。結核以外の持病もあり、90代の患者の54%、80代で38%が亡くなっている。若年者は薬で治るケースが多い



お笑いコンビ「ハリセンボン」

### 箕輪はるかさん

が、隔離のために、長期の入院が必要なのは変わらない。お笑いコンビ「ハリセンボン」の箕輪はるかさん(42)もその一。09年、29歳で肺結核の診断を受け、2カ月間入院した。テレビ番組への出演が続き、1日4時間ほどの睡眠で働いていたところ、最初は「コホコホ」という乾いたせきが出るようになった。その後「ブォー」と大きなせきが出て、なかなか取まらない。半年ほど医者にかからな

いながら、せきのしきで肋骨に痛みを感じるようになり、受診。結核の診断を受けてすぐ入院することになった。「平成の時代」にまさか自分が結核になるなんて」と思ったという。病室から出られるのは、週に1回の検査と入浴の時だけ。3種類の薬を飲む療養が続いた。担当医からは、「肺がチーズみたいに溶けてしまっているんだ」と大きな失敗を繰り返さな

### 医師「肺がチーズみたいに溶けて…」

箕輪さんは免疫の低下を反省し、食事をしっかりととり、睡眠にも気をつけるようになった。「せきが長く続いた時にはためらわずに医師に相談してほしい」。そう振り返る。

結核研究所の加藤所長によると、80年代の米国は、ちょうど今の日本と同じように、10万人あたり10人ほどの罹患率となっていたことで、結核に対する人々の関心が薄れ、対策も削減された。その結果、90年には再び感染者が増えたという。加藤さんは「米国の失敗を繰り返さないように、継続した対策が必要だ」と訴える。

世界的には結核対策は今なお、重要な課題だ。国連の「SDGs」(持続可能な開発目標)は、2030年までに流行を終息させることを目標に掲げている。世界保健機関(WHO)によると、発症していない患者数は、フィリピンが539人、インドネシアが301人、中国が59人、韓国が49人などとなっている。日本国内の患者に占める外国人生まれた人の割合も増えている。00年は2%だったが、21年には11%。多くは日本で働く20代という。この医療機関を受診した方よいのか入国時に説明したり、住環境を整えたりするなど対応が重要になる。

世界的には結核対策は今なお、重要な課題だ。国連の「SDGs」(持続可能な開発目標)は、2030年までに流行を終息させることを目標に掲げている。世界保健機関(WHO)によると、発症していない患者数は、フィリピンが539人、インドネシアが301人、中国が59人、韓国が49人などとなっている。日本国内の患者に占める外国人生まれた人の割合も増えている。00年は2%だったが、21年には11%。多くは日本で働く20代という。この医療機関を受診した方よいのか入国時に説明したり、住環境を整えたりするなど対応が重要になる。

